

自分の立っている地盤がぐらりと揺れたように感じられたのは、平成7年のことであった。この年は、1月に阪神淡路大震災、3月にはオウム真理教による地下鉄サリン事件が起きた。前者では、首相官邸や自治体の初動の後れによって救済できたはずの生命の多くが虚空に消えた。後者では、稀に見るこの無差別テロに対して破壊活動防止法の適用さえ見送られ、組織暴力への断固たる構えをみせることができなかつた。

北朝鮮が日本人拉致を公然と認めたのは平成14年の日朝首脳会談においてであつた。それからもう10年近くが経つ。日本政府による拉致被害認定者は17人だが、同僚の荒木和博教授を代表とする特定失踪者問題調査会によれば、拉致の可能性のある失踪者の数は470人に上るという。拉致問題など現在の民主党指導部にあつてはまるで「繪事」のようである。犯

船長のみは逮捕したもの、結局は処分保留のまま釈放となつた。この不作鳥を察知されて中国に謝罪と賠償を要求されるという顛末であった。屈辱を屈辱ともしない、遊惰の外交である。日本は領海を侵犯されてもせいぜい遺憾の言葉を発するだけの国だと見透かされてしまったのである。尖閣の命運尽きる日がいずれやってくると覚悟しなければなるまい。

昨年の9月には尖閣諸島の周辺海域で中国漁船衝突事件が起り、漁船を拿捕。しかし何に怯えたのか、船員と船舶は即座に手放してしまったのである。

66年間の「疑似平和」を悔悛せよ

罪国家による自国民拉致という辱めをこうまで受け、それでも何ごともなかつたかのように振る舞つていていいのか。

昨年の9月には尖閣諸島の周辺海域で中国漁船衝突事件が起きて、漁船を拿捕。しかし何に怯えたのか、船員と船舶は即座に手放し、船長のみは逮捕されたものの、結局は（この件は）ミスマッチによつて、

# 正論



拓殖大学学長  
渡辺 利夫



拓殖大学学長

渡辺 利夫

身捨つるほどの祖国はありや  
國民の生命と財産を守護し、領  
土、領海、領空を守備するのは、領  
國家が國家たるための最低限の条  
件である。日本という國家は本当に  
に信頼できるか。國家に託してみ  
ずから生命と財産が守られる  
か。多くの被災民の間に國家不信  
がはつきりとした形を取り始めた  
よろみえ。

マツチ擦るつかのまの海に霧深し  
身捨つるほどの祖国はありや

東日本大震災で呻吟しながら日本は66回目の終戦記念日を迎える。この辺りで「敗戦記念日」と言い換えたならどうか。東日本大震災という「第2の敗戦」の真っただ中である。うずたかく積まれた瓦礫の山々に囲まれながら、66年前の悲劇にどう思いを馳せよといふのか。

民主党という、有事をまるで想定するとのない執権党の下で日本

本は「第2の敗戦」を迎えた。——国民として慚愧に耐えない。だが、國びとよ！——ここで立ち止まって深く思慮しようではないか。いかに異様ではあれ、民主党は日本人が養い育てた象徴的な人間集団ではないのか。米国という覇権国家に身を委ねて得た「疑似平和」の中で、日本人は国家主権や有事といった面倒な問題に眼を向けず、エゴイズティックな利益を追求して事無きを得ててきた。

そういうしているうちに「國家なき市民社会」だの「国家主権の相対化」などという物言いの政治勢力が現れても、これに特段の違和感をもつことはなかった。そうした安逸な気分の中で民主党という政治集団に、あらうことが圧倒的な支持をまで与えてしまったのが、平成21年秋の衆院選であった。安逸を貪つてきた国民の油断である。「震災下の8・15」を私どもは66年間の「疑似平和」を悔悛する日として迎えねばならぬ。そつでなければ、日本再生の機会は永遠にやってこないではないか。

(わたなべとじお)